

自由民主党 中央政治大学院
まなびとスコラ・オープン講座
日本の近現代史からまなぶ憲法

第1期「まなびと夜間塾」第4回講座

2020年3月6日

講師：細谷雄一 慶應義塾大学法学部教授
テーマ：「日清・日露はなぜ起こったのか」

私のいただきましたお題が、「日清・日露戦争はなぜ起こったか」というテーマでございます。サブタイトルで〈—国際政治史の視座から—〉という言葉を入れさせていただきましたが、冒頭に私の今日のお話をさせていただく重要な中心的な問題関心を1つ2つ申し上げさせていただきます。私は、慶應大学で西欧外交史、ヨーロッパの外交の過去400年の歴史を学生の皆さんにお話をしております。従って今日のお話も、日本政治史の分野では日清戦争・日露戦争——非常に重厚な、数多くの豊かな研究成果ございまして、著作も沢山ございます。一方でそのような日本の国内の動き、一体、日本国内でどういう動きがあったのか。あるいは日清・日露戦争は、朝鮮半島の中でどのような政局があったのか、あるいは清朝の中ではどのような動きがあったのか。韓国・中国の中の歴史の専門家の方々も、これについては緻密な研究もしていらっしゃいます。

今日聞いてくださっている先生方、恐らく予想であるとか、あるいは期待と、だいぶもしかしたら、異なる角度から、私がお話をさせていただこうと思うのは、当時の国際社会がどういう動きだったのか。日清・日露戦争というものが当時の国際環境、あるいは国際的な構造、システム、そういったものが、このような戦争を生み出したということでございます。つまりは戦争というものが、1人の指導者であるとか、あるいはその国の国内の様々な要因、事情によって起こることもあれば、また、当時の国際環境、国際システムによって戦争が起こることもあるわけでございます。

非常に有名な亡くなられたコロンビア大学の教授を務めたケネス・ウォルツという非常に有名な国際政治学者がいらっしゃいまして、ケネス・ウォルツは戦争の起源について本を書いています。戦争が起こる原因・理由としては、そもそも人間性に問題がある。つまり人間、トゥキディデスにはじまってマキャヴェッリに至るまで、いろんな哲学者・思想家が、そもそも人間は権力を求め利益を求め、より大きな権力を求めればそのことが必然的に衝突して戦争になる。これはイギリスの哲学者のトマス・ホッブスが述べたことでもあるんですね。これが第1のイメージ。

第2のイメージは、国内政治や国内体制。つまり国内の様々な要因・事情によって戦争が起きる。ややマルクスあるいはレーニンの帝国主義はそれに近いような要素があるわけでございますけれども、それに対して第3のイメージ、3つ目のイメージが国際システムによって戦争が起こるといことですね。例えば冷戦の時代において、東西対立、イデオロギー対立の中で、朝鮮戦争、ベトナム戦争、こういったものが当時の冷戦といった国際環境によって生み出された戦争というふうに恐らく見ることもできると思います。

ケネス・ウォルツは、この「3つのイメージ・レベル」というものを前提にした上で、国際政治学者の仕事は国際システムを明らかにすることである。つまりは国際システムによって戦争が起きる。これを突き止めるのが国際政治学者の役割と言ったわけです。それ以降、ケネス・ウォルツのネオリアリズム（新現実主義）の理論以降、多くの政治学者は国際システムや国際社会の研究に時間をかけてきたわけですが、私はヨーロッパの外交史が専門であると同時に国際政治学が専門でもあるということで、当時の国際環境がどういうものであったのか。それがなぜ戦争を導いたのかということに中心的に焦点を当てたいと思っております。

と申しますのも、以前、自民党の「歴史（を学び未来を考える）本部」で様々な講義を企画させていただいた時に、私が最も留意したことの1つが、日本の歴史というものを世界史あるいは国際社会の歴史の中に位置づけるということなんですね。つまり日本が世界から独立し自立して完全に切り離されていたわけじゃなくて、あくまでも国際社会の一員として日本が近現代の道のを歩んで来た。だとしたら、その相互作用、国際社会がどうなっていたのか。日本あるいは日本人が何をしようとしたのか。この相互作用によって初めてより深く歴史が見えるのではないかと。そういった観点から歴史というものを捉えたいと考えていました。

一方で私、大学院では国際政治史・外交史を研究していたわけですが、学問的には、東京大学の名誉教授・国際協力機構（JICA）理事長の北岡伸一先生のゼミで、日本外交史を勉強しました。北岡先生の下に学んだ日本政治外交史、そして大学院、イギリスや慶應で学んだ外交史、国際政治史というものを融合させたらどうなるか。これが私の研究者としての最大の関心事でございましたので、そのような観点から今日はお話をさせていただきます。

（パワーポイント）

まず「はじめに ～『国のかたち』を考える」というスライド用意させていただきました。京都大学を出られた瀧井一博先生という、非常に優れた、明治時代、近現代の歴史、日本の政治史の専門家の方が『文明史のなかの明治憲法—この国のかたちと西洋体験』という本を書いていらっしゃいます。瀧井先生は、日本国憲法、明治時代であれば明治憲法・大日本帝国憲法、憲法というものはそもそも「国際社会との交流によって作られる」、つまり日本が置かれた国際環境であるとか当時の時代背景というものが憲法を作っていくという立場をとっておられます。その瀧井先生が、ご本の中で書いていらっしゃることを、こ

ちらのスライドに用意させていただきました。読み上げさせていただきますと、

「Constitution には、『国のかたち』、すなわちその国の全体的な統治のあり方や仕組みという制度の側面、そしてそれを構想し決断して運営する実践政治の側面が含意されているとみるべきなのである。本書は」——こちらの『文明史のなかの明治憲法』という本でございませけれども、「本書は明治の Constitution の形成過程をテーマとしている。その際、問題とされているのは、『憲法』にとどまらず、それを基軸としながら構築された明治国家の『形』であることを特に強調しておきたい。」

この場合の Constitution を「国制」と瀧井先生は訳しておられて、通常の「憲法」という言葉ではなくて、国を造る仕組み「国のかたち」なんですね。「国のかたち」というものが Constitution。通常、憲法は Constitutional law という言葉を我々は使っているわけです。瀧井先生が強調していらっしゃるの、日本の憲法というものが作られる時に、西欧との交流の中で作られたということです。もう少し詳しく次のスライドでご案内しますと、こちらも読み上げさせていただきます。

○「本書では明治期のわが国における憲法を中心とした立憲制度の形成を、日本国内の視点からではなく、国際的文化接触の視点、すなわち西欧文明の東アジアへの進出という事態を踏まえた比較文明史の観点から捉え直すことが試みられる。」

「憲政の成熟にあわせて、国政もまた変容していく。」これは伊藤博文ですけれども「伊藤博文にとって憲法秩序とは、憲法法典の発布によって確定されたものではなく、時勢の進展に合わせて絶えず進化していくべきものだった。当時の言葉でいうならば、『漸進』である。この文明受容のキー・コンセプトに開眼し、それを基軸とする憲法論を展開したのが岩倉使節団から帰国後の木戸と大久保であったが、この両者の衣鉢を継いだ伊藤によって、漸進主義の立憲論は、大隈重信・岩倉具視（井上毅）両憲法意見書の挾撃をかいくぐり、立憲国家としての明治国制に結実し、明治国家は文明の海原へと船出したのである。」

ここでやや長く引用させていただきました重要なポイントは、まず一つ、日本の憲法、明治憲法というものが「西欧文明との交流の中から出来た」ということとございます。つまり西欧文明をどう取り入れて、どう取り入れないか。

実は今日お話しする日清・日露戦争、これもまた西欧文明との接触と交流であるわけで、我々の「国のかたち」というものが単に日本の国内の論理によってつくられるだけではなく、西欧との接触、国際社会との交流、これによってつくられた。言い換えると国際社会が変われば当然ながら憲法も変わっていかねばいけない。これはダーウィンの進化論

ではありませんが、まさに環境によって、進化していかなければ種は滅びるわけですね。つまり環境が変わっていく中で、この環境に合わせて進化していかなければ結局、我々は滅びてしまうことになる。この「進化」という言葉を、ここで紹介しました伊藤博文が憲法を作る時に、非常に重視していたわけでございます。ですから明治憲法、そして現在の日本国憲法は、これだけの社会が変わり、そして国際環境が変わりながら、全く変わらない。これはもう滅びるしかないわけですね。

環境の変化に合わせて、どう進化していくのか。もちろん進化するには、憲法解釈を変える方法もあれば、あるいは憲法を改正する方法もあるかもしれません。いずれにしましても、憲法というものが「国のかたち」だとすれば、社会あるいは国際環境の変化に合わせて進化しないということは、そもそも憲法を制定した伊藤博文自身が想定していなかったことであって、伊藤は、この全くこの硬直化し進化できなかった憲法を見れば、当然ながらそのことに対して大変残念に思うのではないかというふうに考えております。

ところが、一方で伊藤は、瀧井先生のご本に書いてありますが、ライバルのなかでいかにしてより良い憲法を作っていくかということを発表し、そして実践する時に、その政敵、ライバルによって憲法を否定される、あるいは歪曲されないように欽定憲法という形で、神がつくった憲法である、不磨の大典であるというように、矛盾するシステムを埋め込んだわけですね。つまり、この憲法がすぐに死産しないよう、長生きするよう、そのためにも不磨の大典として、あるいは非常に狡猾な知恵を使って他の者が簡単にはいじれないようにしてしまった。つまり彼は一方で憲法が進化するものであると考えながら、同時に自らが作った憲法、子供を育てるようにあたたかい目で、他の者が手を触れないように欽定憲法という形で、神がつくった憲法とした。その前者であって、進化する憲法ではなく、むしろ欽定憲法、神がつくった憲法であり、誰もさわれない、このような側面・片方がのちに残ってしまった。ある意味では伊藤が政治家として、あまりにも狡猾であったこと不幸であったと言えるかもしれません。

冒頭にこの話を申し上げたのは、今日お話しする日清・日露戦争というものが、西欧文明あるいは国際社会との交流の中で明治の国家を造っていったということ、つまり明治国家を造って、さらに近現代の日本、大正、昭和とつながる、その基礎をつくっていったのが、この戦争であったということでございます。それは憲法もまた同様かもしれませんが、国際社会の中で日本がどのような位置づけであり、そして国際社会とどのようなインタラクションを取ってきたかということが、今日お話しする私の重要なポイントというふうに

感じております。

さて、冒頭に申し上げた通り、日清・日露戦争というものを国際環境あるいは国際政治の中で論じるということですが、まず、当時はどのような時代であったか、その背景を申し上げたいと思います。

○「1. 19世紀末の国際社会と東アジア」と書いてございますが、〈(1)アフリカから東アジアへ〉ということで、当時のヨーロッパの国際政治の中心がアフリカから東アジアへ移っていったわけですね。19世紀の前半には「ウィーン体制」という形で、ヨーロッパの5大国がヨーロッパの秩序を確立していきます。

ところが、このヨーロッパの大国が19世紀のなかばに大きく舵を切って、新しい方向へ進むわけですね。その新しい方向とは何かというと植民地の獲得です。つまり帝国主義の時代において、より多くの植民地を持つ国が、より優れた大国として世界の重要な地位を占める。従って、どの国もヨーロッパの諸大国はより多くの植民地を獲得しようと外へ出て行ったわけです。ヨーロッパから狭い地中海を越えると目の前がすぐアフリカ大陸ですね。ですからイギリスやフランスなどの大国は地中海を越えて、まずはアフリカに進出していくわけでありませう。

このアフリカをめぐる19世紀の半ばから後半にかけて、主要な大国が対立し戦争をしていく。つまりウィーン体制としてのヨーロッパの平安は、裏返すとヨーロッパの大国が軍事力と兵力を主に植民地で使っていた。帝国主義が戦争していたことによって兵力をヨーロッパ大陸ではなく遠方へ展開させていたということが、ウィーン体制によるヨーロッパの平和の——これはコインの裏側になるということですね。

当然ながら19世紀の後半にはイギリスやフランスが植民地との戦争を激しく繰り広げるわけけれども、これが一段落するのが1884年から1885年の「ベルリン会議」です。ヨーロッパの大国の中で唯一、植民地を持っていないのはビスマルクが統治するドイツでした。ドイツ帝国は自国の安定を優先し、ヨーロッパ域内の植民地を持つとはしなかった。そのことによって自らが中立的な立場として、植民地との戦争を終わらせるための仲裁的な会議、1880年代のあたりにベルリンでアフリカ分割をめぐる会議を行います。ここにおいて、ほぼアフリカにおいては植民地の分割が完了します。

エチオピアを唯一の独立国として、ほぼそれ以外の全ての土地が何らかのヨーロッパの大国によって支配されるという形でのアフリカ分割が終わり、当然ながら、新しい機会、資源を求めてヨーロッパの大国が、新しい土地へと向かって行く。その矛先が東アジアだ

ったんですね。

なぜ東アジアで植民地獲得競争が始まったのか。その最大の理由は技術革新です。それまでは、ヨーロッパの大国が簡単にはアジアに行けなかったわけですね、1か月～2か月の時間をかけた船旅でなければ……。しかしながら、これは非常に危険な旅でしたから、途中で難破して船が沈没するかもしれない。非常に危険な船旅であると同時に季節風によって船が動いていましたから、1年のうち移動できる時期は限られていたんですね。

ところが、19世紀なかばの技術革新によって蒸気船というものが広まっていきます。つまり蒸気燃力によって季節風に関係なく1年中いつでも移動できる。その延長線上として定期便というものができます。郵便物や物資を運び、さらには人も乗って定期的にヨーロッパとアジアを往復する。主にイギリスから出て——イギリスの場合、船は大体リバプールあるいはサザンプトンから出ていました——そのままアジアへ向かい、シンガポールないしは香港まで、インド経由で行っていたわけですね。

さらには、この少し後になりますけれど、ロシアがシベリア鉄道を開設します。従って、ロシアは徐々に自らの領土拡張というものがアジアへ向けて進んで行くわけですね。

このような鉄道と蒸気船というものが技術革新で広がることによって、国際政治は根本から変わっていきます。技術革新が国際政治を変えていく。今でもこれはサイバー・宇宙によって国際政治が大きく変わっているわけでございます。あるいは5Gのテクノロジーをめぐって米中が覇権争いをしている訳ですが、リバランス、火花を散らしているわけですが、非常に似たものがあったわけですね。

ついでに、もう一つ、やや補足で申し上げますと、19世紀になぜイギリスがパクス・ブリタニカという世界帝国を維持できたのか、“日（太陽）の沈まぬ帝国”と呼ばれる巨大な帝国を造ったのか、その鍵となったのが2つのコミュニケーションの支配ですね。イギリスは何を支配したかという「シーコミュニケーション」と「テレコミュニケーション」です。世界に先駆けて電信網を作り、それによって帝国からの情報、インテルを含めた情報をイギリス本国で入手できた。非常に早い速度で香港やシンガポールから電信を通じた情報を得たわけです。

さらにはテレコミュニケーションとあわせてシーコミュニケーション、これはご案内の通りイギリスがユーラシア大陸の外縁を中心とした膨大な数の港を押さえることによって、この航路、船が動くとき——当時、蒸気船の石炭燃料が必要ですから、コーリングステーションと呼ばれる、石炭や食料・水を積み込む港が必要だった。この港を得る。

実は、このシーコミュニケーションとテレコミュニケーション、今まさに中国がやっていることですね。中国は19世紀の大英帝国がやったことと同じことをし、スリランカをはじめする港をまず確保する。イタリア、ギリシャですね。そしてテレコミュニケーション。言うまでもなく5Gを支配する。従って、まさに19世紀のパクス・ブリタニカでイギリスがやったことと同じことを中国は今、進めているわけでございます。中国は「中国のかたち」で歴史を学んでいるのかもしれませんが……。

いずれにしても、このようなかたち、ヨーロッパの大国がアフリカ分割を終えたことによって、新しい次のターゲットを東アジアに求めたわけです。その背後に技術革新があるということは先程申し上げた通りかと思えます。

それに続いてアジア、特に中国がその中心的な舞台になります。当時、中国は当然ながら大きな人口を擁していたわけですから、この中国を誰が支配するか、あるいは影響力をさせるかということで、イギリスは、すでに阿片戦争の後に香港を領有していたわけでございますけれど、その後、上海にも利権を拡大します。港を押さえていくというのが当時のイギリスの経済的な進出でございました。従って、港を支配する、徐々に北上してイギリスは権益を拡大していくことになるわけですね。

港を拡大した後に、ロシアが鉄道や、陸路、徐々に領土を拡げていった。

○この地図がロシアの領土が拡がっていった様子でございます。最初はピンク色の薄いところが元々のロシアでした。これがピンク色に広がり、ピンク色の次はオレンジ色が広がり、巨大なエリア、領土というものを押さえていくわけですね。

当時まだシベリア鉄道もない頃に実はウラジオストク……。ザルビンが日本とチョコリンが開通しましたけれども、成田からわずか3時間程度で到着する、ウラジオストクに到着するのに当時は、なんとアフリカ経由でグルッと1周してロシアに行かなくてはならなかった。ピンク色が先ですから、普通だったらオレンジ色が先ですが、ピンク色が先なんですね。つまり海から内陸へ行くという形です。シベリア鉄道の開通によって直接ウラジオストクまで到着するわけですが、海を使って行った。

ウラジオストクの駅が1891年——これはロシアが建設することになります。ウラジオストクに駅を新しくつくる時の工事の式典に参加したのがロシアの皇太子なんですね。ロシアの皇太子はヨーロッパからギリシャの皇太子と共に船に乗って地中海を通り、当時スエズ運河を通りましたからスエズ運河を抜けてアジアへ移り、そして香港に寄ってから長崎へ来ます。

長崎に立ち寄って、ロシア人の水夫が寄る宿があるのですが、そのロシア人の水夫が寄る長崎の宿で、非常にきれいな日本人の女性が食事をサービスするわけです。その1人の最も美しかった日本人の背の高い西洋風の顔だちの女性と夜、上の部屋に消えた。翌朝に降りてきたわけですが、その女性は、のちに青い目の子供を産むんですね。ちなみに、その皇太子はのちにロシア革命で処刑されるニコライ2世です。子孫もみな処刑されたわけですが、もしかしたら日本にロマノフ王朝の子孫がいる可能性もあるんですね。それはもちろんわかりませんが。

いずれにしても、長崎の後に神戸に行って、神戸から京都を見学し、そして大津で斬られています。これが「大津事件」ですね。そこから急遽、東京・江戸に行くのをやめて、ロシアのロマノフ王朝の皇太子は神戸に戻って、そこから船でウラジオストクに行きます。つまり、この航路が当時、ピンク色のところですが、たどり着く航路だった。

じゃ何のためにロシアの皇太子、のちのニコライ2世がそこへ行ったのか、というと、ロシアのシベリア鉄道の竣工の式典だったわけです。これはのちに、ちょうど日露戦争の頃に開通することになりますが、ウラジオストクに鉄道の駅をつくる。これが実はイギリスにとっての脅威であり、日本にとっての脅威なのです。ウラジオストクの非常に豊かな港、これがサンクトペテルブルクそしてモスクワと繋がるわけですから、多くの人がロシアへ移っていく。ここに巨大な都市を造るということになりますと当然ながら、その下の香港・上海を押さえているイギリスにとっては脅威なんですね。

香港・上海を押さえているイギリスとウラジオストクを開発しているロシアとの間で対立が起こると、その最大の焦点は朝鮮半島になる。ロシアが南下して勢力圏を拡張するのに対して、イギリスはロシアの南下を押さえたい。当然ながらその焦点是北京ということになってくるのですけれども、それが当時の地政学であったわけです。

次のスライド、よろしいでしょうか。

○いわゆる英露間の「グレート・ゲーム」ですね。19世紀なかばから20世紀初頭にかけて、ユーラシア大陸において内陸部を支配するロシア帝国と、その外縁部を支配するイギリス帝国との間での勢力圏争いが行われた。これは一般的に「グレート・ゲーム」と呼んでいます。このグレート・ゲーム、元々、ハルフォード・マッキンダーという、現代地政学の開祖とも言われるイギリスの地理学者が、

「ユーラシア大陸のハートランドを支配する者が世界を支配する。」

ユーラシア大陸のハートランド、中央アジア、東欧あたりを彼は指していたわけですが、

このユーラシア大陸のハートランドをめぐる、陸から影響力を拡張するロシアと、海から上陸するイギリス、これがぶつかっていく。その1つの例が、下に書いてございます、アングロ・アフガニスタン戦争ですね。

1838年、そしてのちの1878年、二度、アングロ・アフガニスタン戦争が行われます。これはロシア帝国とイギリス帝国との間でぶつかる。インドは英領インド、イギリスが支配していました。従って、アフガニスタンはロシアとイギリス帝国が衝突する場所であったということになります。

なぜ、この話をいま申し上げているかというと、実は200年間この構造は変わっていないからです。ご承知の通り、2001年からアフガニスタン戦争が起きます。そのあと何が起きたか。ロシアと中国が結託し、ユーラシア大陸の内陸部で、例えば「一帯一路」、あるいは「上海協力機構」という形で協力を強めていくわけです。一方でアメリカは、イギリス、日本が協力して海からその沿岸に影響力を拡張しようとする。その対立の構図はやや異なりますけれども、そのような中でアフガン戦争というものが行われたわけですから、英露間のグレート・ゲームというものが、冷戦時代にはそのまま米ソ間のグレート・ゲームになった。

その対立の焦点となるのは常に半島なんですね。つまり朝鮮半島であって、インドシナ半島であって、そして中東です。海と陸とのつなぎ目の半島で、海洋帝国であるイギリス、現代はアメリカですが、そして大陸の帝国であるロシア、あるいは中国、これがぶつかり合うというのが当時の国際環境であったわけです。

これがなぜ、より熾烈に衝突したかということ、先ほど申し上げた技術革新です。内陸部に関しては鉄道、外縁部に関しては蒸気船、こういった技術革新が起きたことによって、それぞれより広域の領域を支配することができるようになったわけでございます。

先ほど申し上げた通り、国際政治の対立の世界的な中心舞台が、アフリカからアジアへ移ります。19世紀前半の対立の舞台はヨーロッパでした。これがウィーン体制という形で（ヨーロッパ）5大国の一定程度の協調ができます。より多くの利益を求めてアフリカへ進出するわけです。このアフリカ進出が先ほど申し上げた1885年のベルリン会議で、とりあえずの植民地分割闘争が完了しますと、新しい植民地を求めてアジアへ進出する。フランスはインドシナ、今のベトナムを支配するわけです。イギリスは、先に申し上げた通り、中国の沿岸、香港から上海、そして東南アジアであればマレーシア、シンガポールを支配するわけです。一方でロシアは南下してくる。その衝突の契機というものが19世

紀にあった。

ですから、中国の教育では、マルクス・レーニン主義の帝国主義論、近代化した日本が市場が欲しくて侵略を行った。中国を侵略し、朝鮮半島を侵略した。マルクス・レーニン主義的な歴史観から日本国内の経済的な要因に基づいて、日本の侵略というものを語っている。しかしながら、これはマルクス・レーニン主義に基づいた、経済的な動機に基づく日本国内の事情ということになります。

今日、私が申し上げているのは、そのようなマルクス・レーニン主義的な経済的な論理の日本国内の事情からの戦争ということではなく、当時の国際システム、その対立の中心の舞台がまず東アジアになっていた。そしてその対立の構造は、基本的にはイギリスとロシアとの間のグレート・ゲームと言われる構造的な対立だった。そこへ日本が参画する。つまり日本が国際社会に参画するということは、そこへ参画することになるわけですね。当時国際政治の中心がヨーロッパではなく東アジアなのです。ヨーロッパではすでに安定的な秩序が作られていて、対立の焦点は東アジアになっていたわけですから、日本が国際社会に参画するとき、それを抜きに参画することはできないんですね。

ではどういうふうに参加したらいいかということで、当時のヨーロッパは簡単に申し上げれば、片方におけるイギリス、これはイギリス帝国1国でまずは海洋帝国として圧倒的な軍事力をもっていた。それに対抗する勢力が1891年そして1894年、同盟を作った。これは仏露同盟ですね。フランスとロシアが同盟国となっている。

日本はどちらに加わったかということ、明治維新の経緯から、薩長との関係もありまして、イギリスとの関係を基に近代化するわけです。つまり明治国家とは基本的に親英的国家であった。イギリスから海軍あるいは経済、国家の統治というものを学び、外交についてもイギリスとの緊密な関係をつくった。そのことはのちの日英同盟に帰結するわけですが、まずここで頭に入れていただきたいのが、日本の明治国家の近代化は「イギリスとの提携」によって進んだということです。

この時代においてはイギリスと仏露が対立していたのですから必然的に日本はロシアと対立するようになるわけです。イギリスと提携した日本がヨーロッパの国際社会に加わることによって、必然的にロシアの南下、ウラジオストクを中心としたロシアの膨張主義に対して日本が対抗せざるを得ない状況に置かれるわけですね。

中国、清朝や朝鮮王朝と決定的に違うのは、清朝の中国、朝鮮王朝の朝鮮半島、いずれもこのようなヨーロッパの国際政治の現実を無視した、あるいは拒絶したということです。

とてもじゃないけれど、彼らの歴史的な伝統からすればそれは受け入れられないということで、明確に拒絶したわけです。

ところが日本は、このゲームに加わらざるを得ない。つまり好むと好まざるとにかかわらず、この国際社会……「この」とは、いま申し上げた対立のことです。どちらに入ったかというイギリスに入った。そのことによって、好むと好まざるとにかかわらずロシアと対立する。しかし、ロシアは大国ですから、ロシアと戦争するなど、とてもではないけれども当時の日本人には考えられないことだったわけですね。

〇こちらの大きな図を見ていただきたいのですが、「ドイツの統一」、ここに書いてある——これ（『権力と平和の模索』）はハリー・ヒンズリーというケンブリッジ大学の有名な国際政治学者・歴史家の方が書いたものです。ハリー・ヒンズリーはケンブリッジ大学の教授として著名な歴史家ですが、京都大学名誉教授の中西輝政先生の師匠でもあるんですね。翻訳も出ていますけれども、ヒンズリーがこのように書いています。

「ドイツの統一、アメリカの南北戦争の集結、ロシアにおける農奴制の廃止、明治維新、そして1877年の西南戦争による最後の士族の反乱によって、当時の国際的なパワーの構造がつくられていった。それは18世紀以来広がっていたそれとは著しく異なるものであった。」

「18世紀以来広がっていたそれ…」というのがヨーロッパの5大国のパワーバランスなんですね。イギリス、フランス、ロシア、ドイツ、オーストリアです。この5大国のパワーバランスによって、先ほど申し上げた通り、ウィーン体制という形で19世紀のなかばまで安定的な秩序が作られていた。ところが、ドイツが統一したことによって圧倒的な軍事大国・経済大国となった。アメリカは南北戦争において連邦国家として巨大な経済力・軍事力を備えるようになった。そして、それまで鎖国で国際社会に背を向けていた日本が近代化し軍備を増強することによって、無視できないパワーとなった。この「3つの要素」が根本から当時の国際政治のパワーの構造を壊してしまうんですね。

実は今、中国とインドが台頭しているのは、150年ぶりに、この構造が変わっているということなのです。第一次世界大戦後も第二次世界大戦後もこの構造は変わらないです。主要な大国は、ヨーロッパの5大国に加えた日本とアメリカです。それが冷戦終結頃まで続いたわけですが、少なくとも21世紀に入ると、それが中国とインド、さらに、これに加わるということについて、もう一度、国際政治のパワーの構造が根本から変わるわけですね。

19世紀にパワーの構造が変わって、その後どうなったか。二度の世界大戦を経験した。

このままこれを放置すると、また世界戦争になるおそれがあるわけですね。パワーの構造が変わるということは、根本から国際政治が大きく揺らぐことになりますので不安定化する。今の国際政治の不安定は大きく考えて、このパワーの構造が変わったということなんですね。

みな国内の問題、例えば左派の連中は、安倍政権が悪いとか、あるいは中国が悪いとか、アメリカは帝国主義だとか、いろんな批判があります。それは国内しか見ていない。そうではなく、パワーの構造全体、国際政治のシステムが変わっているということです。

これが19世紀末のヨーロッパということになっていた。つまり、日本はヨーロッパの国際政治に加わるという大変な試練を経験したわけですが、同時に実は日本という非常に体の重たいファクターがそこへ加わったことで、構造もまた変わってしまったんですね。

○この構図が、先ほど申し上げたグレート・ゲームの象徴的な絵でございまして、イギリスの「パンチ」(週刊風刺漫画雑誌)に出て来るものでございまして、真ん中に立っている人がアフガニスタンです。そのアフガニスタンの両側に——ライオンはご承知の通りイギリスの象徴であって、熊はロシアの象徴ですから、ライオンと熊、イギリスとロシアに挟まれて、さあ困ったと腕を組んでいるのがアフガニスタン。これが当時の国際政治のシステムだったわけです。次のスライドをお願いします。

○これが、いま私の申し上げたグローバルなパワーバランスの変化ということで、19世紀のなかばから20世紀初頭にかけて、ユーラシア大陸において内陸部を支配するロシア帝国と、その外縁部における影響力を拡大するイギリス帝国との間で勢力権争いが進み、これをグレート・ゲームと称することになったというものです。これが日清戦争に繋がってくるということで、ちょっと飛ばして、次のスライド、

○当時の日清戦争開戦の様子ということになるわけですが、パワーの構図から見ますと、更に次のスライド……

○当時ロシアは釣り竿を横に置き、上から見おろして、左下のCORÉE(コレー)は韓国、朝鮮半島ですね。朝鮮半島をロシアは奪りたいわけですが、いわば(釣り竿を垂らした)日本と清国を争わせることによって漁夫の利で、その後に影響力を伸張せる。これがロシアの考えていた策略であったわけですね。日本が朝鮮半島に関与を始めたことによって、大きくまた東アジア勢力が変化しまして…。これが日清戦争の時の写真でございまして、次のスライドは…

○(甲冑を着け)侍のような恰好をした小さな日本が、巨大な中国を倒している戯画です。

つまり当時の中国は大国として文明的にも大変に尊敬され恐れられていたのですが、実は小人の日本に簡単に敗れてしまったということです。何で小人の日本に敗れてしまったかということが、冒頭にお話した明治憲法の話とも繋がってきます。つまり日本は近代化とナショナリズムによって国家を統合し、そして近代的な統治システムを作った。つまり文明論的・人種的に黄色人種は劣っているから結局は白人の支配を受けなければいけない——これは多くの人たちが当時の世界を信じていたことでありますが、そうではない、国民を統合し、そして近代的な統一機構を作り、さらには強大な軍事組織を作ることによって、黄色人種、アジア人の日本も十分に戦争し勝利を収めることができる。これが当時のイメージであったわけでございます。次のスライドで、その背景となることを、もう1つ申し上げたいのですが。

○1873年に岩倉使節団が、ドイツの首都ベルリンを訪問します。この時にドイツの首都ベルリンで、当時の宰相ビスマルクが、あの大国フランスに後発国のドイツ・プロイセンが勝利を収めた普仏戦争の2年後でございます。ナポレオンが率いた大国、ヨーロッパを支配したフランスが、後発国のドイツ・プロイセンに敗れてしまった。世界に大変な驚きを与え、また、ドイツは国土を統一し、強大な軍隊を持った。言ってみれば日本のモデルとなったわけでございますけれども、ドイツの首都ベルリンで当時の宰相ビスマルクを表敬訪問した。そして日本の岩倉使節団は、ビスマルクの話を聞かせてもらいます。そのときビスマルクが日本の指導者に何と言ったか。次のように言うわけですね。

「世界のあらゆる国家がお互いに礼節をもって交わっているというが、これは虚構である。現実には強国の政府が弱小国を圧迫している。幼少の頃、プロイセンは弱小にして、自分はそうした状態を変えようと常に願ってきた。万国公法は諸国家間の秩序維持を目的としているが、強国が他国と紛争を生じたならば、強国は自国の目的に適合するかぎり、それにしたがって行為するのであり、さもない場合は自らの力を用いるであろう。」

万国公法は国際法ということでございますけれども、

「弱小国は、常に不利に立たされているのである。このことはプロイセンに該当するところであったが、プロイセンは国民の愛国主義の助けによってそうした事態を変えることができた。」

つまり国難危機の時代に、なぜドイツが戦争に勝ち、そして大国の道を台頭できたのか。その秘訣をビスマルクは教えたわけです。

まず愛国主義。ナショナリズムによって国民が結束しなければいけない。国民が分裂し

ていれば、それは外国の勢力の介入を受けて、その国が支配の下に置かれてしまう。国内が分裂して外国の支配を受ける。これはまさに当時の朝鮮半島ですね。朝鮮半島で保守派と改革派が対立し、改革派が日本につき、保守派が中国・ロシアと提携したことによって、結局は外国の介入を招いて朝鮮半島は、のちに日本の支配下へ入ることになるのですけれども、ナショナリズムによって国土・国民が結束していなければいけない。さらには国際法を信用するな、ということですね。

国際法など国を守ってくれない。重要なのは軍隊、実力である。自分たちの自助努力で自分たちを守らなければいけない。もしもそのような軍隊がなければ日本はいずれ支配の下に置かれるだろう。ということで、日本の若き指導者はビスマルクに会って、ナショナリズムの日本と、パワーポリティクスというもの、これを学んだわけですね。これが結局は「明治の日本の行動原理」となり、そして帰国後、明治憲法の中でこのような精神を注入したわけです。

私がもう1つ申し上げたいのは、結局、国際環境——この時代はナショナリズムと帝国主義とパワーポリティクスの時代だったということです。明治憲法はそのような思想や精神を基に作られています。

ところが、第一次世界大戦の次世代は世界が変わるんですね。国際連盟を作って法の支配によって問題を解決しようとする。そして帝国主義というものはコストがかかりすぎてデメリットがあり、さらには国際社会から反発を招くということで、第一次世界大戦によって国際社会の指導的な原理が少しずつ変わっていくのです。完全に変わるわけではありません。パワーポリテックスの時代は残りますけれども。

国際主義というものが新しい潮流となって、国際連盟や国際法というものが尊重され、さらにナショナリズムというものが強すぎるとむしろそのことが戦争に帰結する。ナショナリズムを抑制するという必要性も指摘される。

ところが残念ながら国際法を無視し、軍事力を信じ、さらには植民地拡大の必要を疑わないという意味において、憲法を変えない、憲法の本質を変えないことによって、日本は国際社会の変化というものを感じ取ることができなかつたんですね。私はこのことが結局は戦前の日本のつまずき★一因なのだと、先程ご紹介頂いた『歴史認識とは何か』という本の中で書かせていただきました。

○「日清戦争の勃発」ということで、今日の私のお話は恐らく先生方のご想像やご期待と違うのではないかと冒頭に申し上げたのですが、細かい経緯は申し上げません。つまりは

膨大な研究の蓄積があって、それらを私は繰り返すことをしませんし、またその知識もございませんが、時間が限られていますので、やや駆け足で申し上げますと、自民党本部の「歴史の本部」で関わらせていただいた『日本近現代史講義』の中で、日清戦争の章を岡本隆司先生にお話をいただき書いていただきました。

その中で岡本先生は何と書いたかという、実は豊臣秀吉の朝鮮出兵と日清戦争と朝鮮戦争、全部一緒だと。基本的には「先に攻撃をしかけたのが」南からか北からか、陸からか海からかが違うわけで、「いずれも一方が優勢になれば、必ず反作用がはたらいた。とりわけ南方からの攻撃には、対抗し北上を阻止しようと、大陸の軍事力が出現」して、それを食いとどめるような原理が働いたわけですね。

つまり「半島南北のせめぎあいと分立という事態は、それぞれのヒンターランド（後背地）のパワーバランスと密接な関わりにあった。北の大陸と南方の列島ないし海洋との勢力に消長があって、戦争を惹き起こすケースもある。以上がここ五百年の形成だったといえようか。」

つまり今後も変わらない。朝鮮半島が強大な王朝や国家によって支配されていれば外国の介入は起こりません。ところが、朝鮮半島の統治が弱くなればこれは外国の介入を招く。そして外国の介入は、常に陸と海の両方から入って来て、朝鮮半島の中で戦争が起こる。これが歴史的に繰り返された例えであるということですね。

今、戦争は行われておりませんが、事実上、韓国の政治においては、アメリカや日本の協力を求める勢力と、一方で北朝鮮や中国とより緊密な関係を結ぶべきだという勢力との間で、まさにソウルの政治の舞台で南北間の対立があるんですね。まさに政治が分裂している、イデオロギー的に分断している。日清戦争も同じような形で、国内の分裂が外国の介入を招いたということですね。

○駆け足で、ロシアについて申し上げますと、「ロシア帝国の膨張主義」ということです。ロシア帝国の皇帝ニコライ2世、先ほど申し上げた、若かりし頃に長崎に上陸し夜遊びをしていた青年あのニコライ2世ですが、大きくなって皇帝となり、こういうことを述べています。「朝鮮を奪いたくないが、日本に朝鮮を占領されることは何としても阻止したい。」

つまり元々、ロシアも日本も朝鮮半島を支配するつもりはなかったんですね。ところが、あまりにも朝鮮王朝の統治が弱すぎて、内紛・分裂がありすぎた。つまり内紛の中でそれぞれの分裂した勢力がそれぞれが日本に助けを求め、またロシアに助けを求めたわけです。相手が助けを求めているのは、日本から見たらロシアが朝鮮半島を支配するかもしれない。

ロシアから見たら日本が朝鮮半島を支配するかもしれない。国際政治学では「セキュリティ・ジレンマ」と呼んでいますけれども、この恐怖心が介入を招いてしまったということですね。

その結果として、結局、先ほど申し上げたような日清戦争、日露戦争になってしまった。ヘンリー・キッシンジャーは『外交』という本の中で、結局、ロシアは一貫して領土を膨張させているということを述べています。自国の安全を守るのに、ロシアは外交の、国際法なんか信用していません。ロシアが信用するのは領土だけです。領土がなければ自分たちの国は守れないということで、より大きな領土があれば、より大きな安全が得られる。これが一貫したロシアの行動原理だったんですね。

時間がございませんので、次のスライド…。

○「日露戦争とは何だったのか」。慶應大学の私の上司でもあった横手慎二先生が中公新書の『日露戦争史』、これは日本で最も優れたロシア戦史、ロシアの膨大な資料を用いた研究と申し上げられると思いますが、横手先生はそこでこう書いています。

「日露戦争は、明治新体制を発足させてから40年も経たないアジアの国家が、ヨーロッパの大国を敗った大きな事件であった。ヨーロッパ諸国に学んだ改革を巧みに実行すれば、非ヨーロッパの国でもヨーロッパ諸国に戦争を挑み、勝つことができるという事実を明確に示した。これこそが日露戦争の生み出した思想（イデオロギー）であったと言えるだろう。」

つまり、この思想こそが20世紀をつくっていったのです。のちに中国革命が起きて、朝鮮戦争が起きて、ベトナム戦争が起こる。多くの国で自分たちの近代化をし、近代的な憲法を持ち、近代的な軍隊を持てば、自分たちの国家をつくり独立し守ることができる。この日露戦争のイデオロギーが結局のところは明治政府を支配することになるということです。

次の次、最後のスライドにて、だいぶ時間が経ってしまいましたが、終わらせていただきたいと思います。

○これはルネ・ジローというフランスの有名な外交史家の大家が——翻訳の本の中で書いていることですが、

「『黄色人種』の勝利はヨーロッパ人やアメリカ人に不安を与え、アジアの人々には多大な希望をかき立てさせた。」

先ほど、日清戦争は朝鮮半島をめぐる勢力権争いという形であり、朝鮮半島が地政学的

な紛争の舞台であって、朝鮮王朝・朝鮮半島での内紛が戦争を招くと申し上げましたが、日露戦争は逆に、「20世紀の原理を生み出した」ということなんですね。一方で地政学的な対立がありながら、イギリスとロシアとの間のグレート・ゲーム、陸と海の対立、この対立と同時に、新しいイデオロギーを生み出した。つまりは自分たちの国家を造り自分たちが独立するということが非ヨーロッパ諸国でも可能である。そして「白人が優れている・黄色人種は劣っている」というような、それまでの信念を破壊して、アジアの独立というものが世界の独立というものを促したということで、日露戦争が20世紀の新しい原点となったということでございます。

戦争自体について詳しくは申し上げませんでしたが、以上で当時の国際政治の大きな流れをお話しさせていただきました。(拍手)

(この回おわり)